opusdei.org

黙想:キリストの聖 体の祭日

黙想のテーマ:「人間のためのキリストの全面的な献身」 「いけにえと交わりの食卓」 「私たちの道の途上におられるイエス」

2025/06/18

人間のためのキリストの全面的な献 身

いけにえと交わりの食卓

私たちの道の途上におられるイエス

今日、キリスト信者は、感謝の内に この上ない喜びで満たされます。と いうのも、祭壇上のパンとぶどう酒 が、キリストの栄光の御体と御血に 変わり、その現存を目の当りにする からです。教会は13世紀から、この 祭日を聖体への信仰を表すものとし て祝っています。「出来うる限り、 休まずにほめ称えよ。成し得る最高 の賞替でも決して十分とは言えない のだから一聖トマス・アクイナスは 続唱ラウダ・シオンにしたためまし た一。今日祝う命のための生きたパ ンを限りなく称えよ。聖なる食卓 で、兄弟として集まっていた12人に お与えになった時のパンである」。 そして続けます。「歓喜に満ちて、 朗々と喜ばしく、清い心からの賞賛 であるように。聖体の制定を記念す る盛大な祝いの日だからし™。

この聖なる形態ーパンとぶどう酒一 のうちに神としてとどまり、全能の 力によって、あらゆる時代のすべて の人のために、ご自分をお捧げにな ります。主の過ぎ越し一ご受難、ご 死去、復活の神秘一が、終わること はありません。「神の永遠にあずか り、こうして、すべての時にまた がって、そのうちに現存させられ る」図のです。主は、小麦とブドウ から作られる簡素なたまものを、私 たちがキリストご自身を尊ぶことが できるものにしてくださったので す。聖ホセマリアは、聖体を、いつ までも続く愛の奇跡であると説明し ました。「『子らのまことのパンで ある』『永遠の父の長子であられる イエスは、食物として御自らをお与 えになりました。この世にあって力 をお与えになるイエス・キリストご 自身が、天では、『主の食卓にわれ らを座らせ、天の聖人らの仲間とし て同じ世継ぎに加える』っために、 私たちを待っておられます。なぜな

ら、キリストは不滅の命ですから、 『栄養を摂るものは、この世では死 んでも、永遠に生きる』「町のです」

後を追ってきた人たちの空腹状態を 心配する弟子たちに、イエスは「あ なたがたが彼らに食べ物を与えなさ い」(ルカ9・13)と、言われまし た。彼らには5つのパンと2匹の魚 があるだけです。しかし、「全ての 人が食べて満腹した。そして残った パンの屑を集めると、12籠もあっ た」(ルカ9・17)のです。この奇跡 は、私たちの生活における聖体を想 像させる、豊かさに満ち溢れるイ メージの一つです。また使徒職の仕 事をも映し出しています。あの恩恵 の管理者になることです。イエスは 「教会に、ご自分の死と復活の記念 祭儀を託ししました「すなわち、こ

れは、いつくしみの秘跡、一致のしるし、愛のきずな、キリストが食され、心は恩恵に満たされ、まして未来の栄光の保証がわたしたちに与えられる過越しのうたげです」「77]。

聖パウロは、彼自身受け取った、し かもキリストからのあの言い伝えを 思い出しています。「主イエスは、 引き渡される夜、パンを取り、感謝 の祈りをささげてそれを裂き、『こ れは、あなたがたのためのわたしの 体である』と言われました」(一コ リント11・23-24)。この文言は、古 の子羊のいけにえと、砂漠を旅する イスラエルの民に神が与えられた食 べ物、マンナを髣髴させます。たと えいけにえを捧げることであって も、そのいけにえから頂ける実りへ の感謝をこめて行われるのです。

しかし、主がこの奇跡について最初 に言明された時、それは快く受け入 れられませんでした。「わたしは天

から下ってきた生きたパンである。 このパンを食べるなら、その人は永 遠に生きる」(ヨハネ6・51)と仰せ になった時のことです。その話は、 多くの人の間に物議を醸しだしまし たし、今も驚くべきことです。「聖 体と十字架とはつまずきの石です。 同じ神秘であって、つねに分裂の要 因となるものです。『あなたがたも 離れて行きたいか』 (ヨハネ6・67) というイエスの問いかけは今も行わ れていますが、それは、『永遠のい のちのことば』(ヨハネ6・68)を 持っているのはご自分だけであるこ と、そして、ご自分が与える聖体と いう贈り物を信仰をもっていただく ことはご自身をいただくことだとい うことを表すための愛の招きでもあ るのです | 1870

最終的に、主は、聖体において、私 たちを皆、その御体に結びつけま す。それゆえ、聖体拝領によって兄 弟との一致が堅くなるのです。「キ リストとその聖霊のたまものを 拝領において受けたわたしたちした の奥底から、兄弟として一致まして一致また。 の奥底からがれで満たされまのはいるがれでは、したすのはいるではしまってのです。 をずかる、こうしまとしての交わりはいる。 とに食事をはるのですー 経験をはるかに超えるのですー

マリアの子、イエスは、度々、人々に会いに来られます。福音書にはその出会いの様子がいろいろ述でのサマリア婦人との出会い、エリコでのサカリアとの、またバルティマイとの出会い、いずれも、すぐさまイエスはの来訪が知れ渡ります。イエスはようも多くのところで、地上にお住ま

いだった時と同じように、私たちと 出会うために通りを巡っておられま す。

祭日には、楽を奏で、聖歌を歌い、 色とりどりの花を飾り、香を焚き、 あかりを灯し、芸術的な粋を尽くし て、主を礼拝し、主をほめ称えま す。愛と信心をこめて聖体行列を準 備しても、神に捧げるべき感謝を表 すには不十分に思えるのです。しか し、こうしたことの上に、より主を ほめ称えることができるのは、キリ ストご自身がいつも、私たちの中で 生き生きと振舞われるように、主に お任せすることです。聖ホセマリア が言っています。「主の御体を拝領 して新たにされたのであれば、その 事実を行いに表さなければならない のです。私たちは心から平和と献身 と奉仕を望まねばならず、私たちの 言葉は、人を慰め、助けることばで なければなりませんが、特に神の光 を人に伝えることができるよう、真

実にして明白かつ適切であるべきです。そしてふるまいは、主の御業やご生活を想起させるもの、つまり、『キリストのよき香』をふりまく、首尾一貫した、的確で効果的なものでなければならないのです」[10]。

「おお、良き牧者、真のパン、あ あ、私たちのイエスよ、私たちをお 憐れみください。私たちを育み、お 守りください。この世で本物の善を 望ませてください | ……。私たちは、 聖体において、天国の至福をわずか ながら味わうことができます。それ ゆえ、主のご托身を受け入れた聖マ リアを称えるよう促されるのです。 TAve verum corpus, natum de Maria Virgine (おとめマリアより生 まれたまいし、真の人なる主よ)[12] と。

- <u>[1]</u> 聖トマス・アクイナス、続唱、 ラウダ・シオン。
- [2] カトリック教会のカテキズム、 1085番。
- [<u>3]</u>聖トマス・アクイナス、 続唱、 ラウダ・シオン。
- [4] 同。
- [5] 聖アウグスティヌス、 In Ioannis Evangelium tractatus, 26, 20 (PL 35, 1616)。
- [6] 聖ホセマリア『知識の香』152 番。
- [7] カトリック教会のカテキズム、 1323番。
- [8] カトリック教会のカテキズム、 1336番。
- [9] 聖ヨハネ・パウロ2世、回勅「教 会にいのちを与える聖体」24番。

[10] 聖ホセマリア『知識の香』156 番。

<u>[11]</u> 聖トマス・アクイナス、続唱 ラ ウダ・シオン。

[12] 聖歌 アヴェ・ヴェルム。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/mokusou-kirisuto-no-seitai-art/(2025/11/13)